

## 井上逸兵のしましまにしまつしま!

いのうえいっべい(社会言語学者)

### バー・チャルに生きる

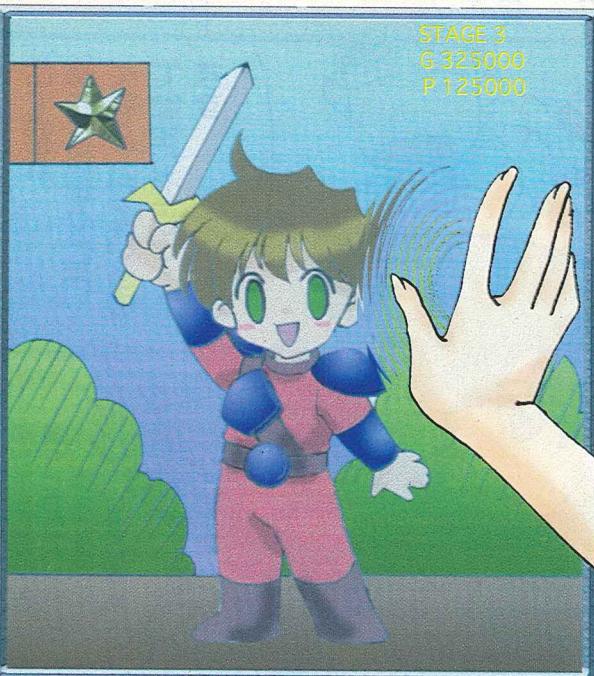
バーチャルリアリティという言葉を近頃よく耳にする。日本語なら「仮想現実」。CG（コンピュータグラフィックス）で現実のイメージに近い、三次元のように作られた仮想の世界だ。ゲームでもバーチャルっぽいものが最近は結構あるようだね。

ディズニーの映画『ターザン』のことを制作者がテレビでしゃべっていたけど、「ターザン」をもつとも「リアル」に描くことができるのはアニメーションなのだ、というようなことを言っていた。過去にいくつか実写版の『ターザン』があつたけど、アニメが一番ターザンらしさを表現できるんだそうだ。確かにそうだろう。昔の特撮の技術ではターザンの動きを「ターザン」らしく、しかもホントらしくするのは難しかつただろうと思う。

ディズニーの『ターザン』をバーチャルとは呼ぶことはないだろうけど、とにかく本物のように見える「偽物」をバーチャルというようになってきた。「バーチャル（Virtual）」というと「仮想の」という意味だということになつてている。

ところが不思議なことに、この「バーチャル」という言葉はもともと「本物」という意味なのである。見かけじゃなく、実質があるという意味だ。「仮想の」という意味だ。バーチャル」という意味だ。バーチャルといふ意味もあるから、本来ならおかしなことになつていわけだね。

世界で一番大きな英語の辞書（一冊じやなく何巻もある）である、オックスフォード英語辞典をのぞいて見た。十七世紀頃に使われ始めた宗教的な意味もこぎつかけになつたのは、一九五〇年前後の物理学の用語としての使わ



れ方だったみたいだ。コンピュータの用語になつたのは一九六〇年ぐらいのようである。詳しいことはよくわからない。それから、言葉の意味の移り変わりにはこういうことはよくあるけれど、言語学的にこういう変化がなぜあつたかを考えるのも今回はやめておこう（言語学的に考えてもたぶんホントのことろはわからないだろうけど）。

「本物」つていつたいなんだろうね。世の中には現実に起つたことなのにウソっぽい話はたくさんある。映画やドラマやRPGはホントじゃないとわかつていて、ワクワクドキドキしてしまう（すみません、最後のはやつたことないです。想像です）。「この話は実話です」なんていうドラマがたまにあるけど、そういうの結局どうでもいいと思うこともありまするんじゃないかな。そのドラマの「現実」に入り込んでいければそれでいい。

ドラマやCGだけの話じゃない。オウムもライブスペースも、中に入っている人にとっては「本物」なのだろう。地球が太陽のまわりを回つてるって思つて生きてきたけど、それも別にこの目で確かめたわけじゃないからねえ。よくわからなくなつてくるね。現実はバーチャルで、バーチャルは現実つてことかな？